

第6回海陽町学校のあり方検討委員会
議事録

日 時：令和4年12月28日（水） 10:00～11:45

場 所：海南文化館 大会議室

出席者：委員16名中9名出席（別紙名簿参照）

事務局：（担当課）海陽町教育委員会 三浦教育長、森崎教育次長、浦川主査
（受託者）リージョナルデザイン株式会社 安孫子

■議事1 海陽町学校のあり方基本方針（答申案）

登井委員長：それでは始めます。議題1海陽町学校のあり方基本方針の検討について事務局から説明をしてください。

事務局：それでは、資料1をご覧ください。前回までの委員会でのご意見や住民アンケートの調査結果を、教育、地域連携、まちづくり、学校施設の適正化の4つの視点で整理をした資料となっております。この資料も参考にいただきながら改めて、4つの視点から海陽町の学校のあり方を話し合っていたきたいと思えます。また、資料2でありますが、答申案の海陽町の学校のあり方基本方針の骨子案ということがございます。答申にあたって、2番目の学校の適正規模の基本的な考え方、また3番目の海陽町の学校のあり方等々、今日の議題にもありますそれぞれの小中学校の学級数や学校数といった体制、その再編の時期につきましてもご協議をいただければと思えます。以上でございます。

登井委員長：ありがとうございました。事務局から説明ありました資料1について話を進めていきたいと思えます。視点1の意見が多くなっていますが、初めてご覧になる方もおられるかもしれませんので、5分ぐらい時間をおきますので、読んでいただいて、ご意見いただくようにしますので、お願いいたします。

登井委員長：5分が過ぎましたので、ご意見をいただけたらなど、どうでしょうか？

井口委員：学校体制については、2校2校というのが大まかに、地域差はあるにしろ、概ね世論だと思えますが、1校1校だったら、地域差が極端に出てくる中で、小中一貫のチェンスクールはどういうメリットがあって、どういう内容でやっているのか教えていただきたい。

福田委員：義務教育9年間を見通して、保育園も一緒になっていますので保育園に入学して

くるところからスタートして、どういうふうな子どもたちを育てていくかを検討しています。小学校と中学校が、いろんな授業で連携しながら、一緒になってやっています。ただちょっと距離感がありますね。牟岐町は、同じ敷地内に全部揃っていますけど、宍喰の場合はどうしても1キロぐらい離れていますので、ちょっと距離感があるからチェーンスクールという形をとっています。特に行事では地域の方々、いろんな指導者として参加していただいた授業、総合学習にも参加していただいています。みんな育てていこうというイメージですね。例えば、防災教育は厳しいですよ。小学生は小学生、中学生は中学生として、ということができるかなっていうのを手探り状態です。来年の構想として、中学生と小学生が一緒になって、やろうっていう計画をつくりつつあります。今は、いろんな課題解決学習であるとか、地域の方と一緒にやっています。

三浦教育長：徳島県の子どもたちが減って行って学校数がどんどん減っていくと、この小規模校を残すための政策として、小中一貫教育を県が推進、これを徳島型の小中一貫教育、チェーンスクールとなっています。牟岐町では、同じ敷地内に小学校と中学校を建てているので、パッケージでも一体型みたいな、それぞれの学校の教員が小中学校を行き来したり、自主防災会に入ったりとか、研修したり、学校行事を一緒にしたりしながら、小中一貫を進めています。元々ある小規模校を存続するための方策です。今、3年目になります。

井口委員：ありがとうございます。それは、継続してやる感じですか。

三浦教育長：県としてはモデル校で何か結果を残したらこれを推進しますみたいな方向で、今は3年間、いろいろ人の配置とかお金も入ってくるわけですが、今非常に良い効果が出ているので、教育委員会は、これを続けていきたいという方向でございます。

登井委員長：チェーンスクールをやるとなったら、中学校、小学校の県費の先生に兼務をしてもうらいというイメージですか。例えば、一部中学校の先生が、小学校6年生の算数へ行ったりとかでしょうか。

三浦教育長：位置づけはできておりません。職員同士、小学校から中学校、中学校から小学校という行き来はできているのですが。

登井委員長：ありがとうございました。小学校も高学年に専任の先生を入れてというようなところは、県下の学校でも増えてきているようなこともあります。何かございませんか。前回の委員会では、今進めていってもいいし、もっと先を見越して、子どもの数が少なくなる予想をされるので、もっと進めていったらいいじゃないかという意見も出ていますので、こちらも含めて話をいただけたらありがたいなと思います。

井口委員：アンケートの中で、2校2校でモデルとしてやらなければならぬのであれば、穴喰はそのまゝ2校の中で、あと海南海部っていう話になっていくと思う。今の段階は、海南に来てくれるんだろうみたいな保護者も居ると思うんですよ。逆に今度は海部の校舎行きますってなったら、大半がってなるかもしれないし、ある程度わかって結果が出ている中で、新たに校舎なのか、海南の校舎を使うのか、手一杯そうですね。

事務局：先ほど井口委員の話の施設の実際の人数がどこまで足りているか、というようなことを踏まえ、以前説明をさせていただいたのですが、海南小学校に、海部小学校をそのまま受けることができないということをお示しました。行財政の観点から言うと、海南小学校に行くっていう形にもなるでしょうし、いやいや、そうじゃなくて全く違う校舎で、両方とも生徒さんが入れるような場所をつくっていくというような格好になる。そんなことも考えられるので、今現存している小学校のまま活用すると、ちょっと入れないという格好になります。

登井委員長：ありがとうございました。とりあえず一緒になることを見据えた上で、一旦海南か海部に新しい校舎を建てることを進めていく。保護者の意見もすごく分かれると思います。

角田委員：海部からの気持ちからしたら、新しくできた学校はいろんな意味で安心ができます。南海トラフの影響がないことも考えた上での、そういった計画は決まっていなくても、それらも含めて、新たにつくった上で、決まったことに対しては従うと思うんです。従うって言葉悪いですけど、ここは新しくやった方がいいのかなと思います。

登井委員長：ありがとうございます。ただいまの意見に対して皆さんの意見はどうでしょうか。今の学校を利用していくなれば、先ほどから出ているように、いろんな耐震の問題とか、修理をしていかなければならないことなどを考えなければなりません。今、出された意見は、新しい場所で、イエローゾーン、レッドゾーンでない場所へ、何か災害が起こった時に、本当にそこが起点となるような場所に、新しく校舎を作るというようなご意見じゃないでしょうか。個人的なことをお話しますが、東日本大震災が起きた後、しばらくして気仙沼とか仙台を訪れたんですが、やっぱりしっかりした場所に建てていますよね。もしも統合になった場合には、吸収合併ではなく、対等合併にしてほしいと思います。安全な場所に皆さんが避難できるような場所に校舎を建てるというのはどうかと考えています。

村田委員：アンケートに出ている、教職員の確保、あるいは今の教育サービスの質を下げないようにすることが非常に大事だと思うんで、この教職員数の確保を県からくれるのは決

まっているので、町としてどう、保証するかというあたりとか。あと統合となると、通学距離の問題も出ていますよね。地域住民、保護者に安心を与えるような、そういうふうな方針というかね、そんな出さなきゃいかんなどと思っています。当面は2校2校体制ということですけど、もっとそんな先になっていくと、1校1校体制とか。例えばですよ、海南と海部が一緒になったときには、とりあえず今の海南小学校の校舎を利用しておいて、校舎建築の時期なんかもある程度見通しっていうかね、そんなお金があるのかなと思ったりもした。

登井委員長：ありがとうございました。今いろんな視点からの意見が出されましたけれども皆さん、反対意見があったり、いや私はこう考えるというような意見があったら、発言していただけたらありがたいなと思います。

元木委員：栄喰小学校中学校がチェーンスクールをやっているっていうのを応援していくのやったら、やっぱり海陽中学校と海南小学校、海部小学校、その小中の一貫教育みたいなのも考えていく形。県の方もずっとそういう小規模を応援していくってことをしていくんだしたら、またこれは距離が離れてしまって、新しいところに建てて、中学校も一緒に建てると、パッケージスクールみたいなことができるかとか、この海南小学校と海陽中学校の距離だったらどうなる。小学校中学校にいる保護者さんからマラソン大会と一緒にやったりとか、いろんな行事をやっているという中で、その子どもたちが、9年の繋がりにっていうね、すごいそういう縦の繋がりができて、自分は幼稚園で仕事をしているので、中学校や小学校の方がやっぱり小さい子どものところに来て、小さいときから、15歳までの教育ができて、そこでまた、高校からずっと10年先までの教育を見据えてできることが、この町のいいところじゃないかなってすごく思うので、さっき言ったチェーンスクールが、海陽中学校の場所と海南小学校の場所であったり、また新しく建てたら、いろいろなんだと思います。

登井委員長：ありがとうございます。委員さんの意見で中学校でもコミュニティを続けていくんだしたら近い方がいいんじゃないかという意見で、あるいは、中学校も一緒に小学校の近くにできればいいんじゃないかなってような意見も少しあったかなと思いますが、そこらあたりどうでしょうか。

元木委員：もう10年後20年後を見据えた検討となったときに、20年後って考えたら自分の子どもが親世代になるとるよなって思うと、この人数の子どもたちが親世代になったときに果たして幼稚園がないかもしれないと思うかなとか、なんかちょっと盛り返してほしい気持ちと本当に1校1校のときに一つ建てるとか、ずっと学びが保証されていったらいいなって思います。

登井委員長：保育所から小学校中学校高等学校と一貫的に教育ができるような環境ということで、できるだけ本当に距離の近いところとお話をいただきました。10年、20年先に海陽町の人口は本当にどのような状態になっているのか、なかなか考えることが難しいですが、やっぱりそれを見越して話し合いを進めていけたらなと思いますので、どんどん意見を言ってください。

三浦教育長：今ちょっと意見あった、穴喰中学校の状況を見ながら、効果があるなら海陽中学校もチェンスクールのお話を教育委員会の中でしています。教育は人であるということで、教職員を確保せんといかんねという状況になってくるというのも中学校で免許外ばかりで免許を持っていない先生が授業をしている。やっぱり非常に厳しいところがある。

登井委員長：今の教育長の意見も含めて質問とかご意見いただけたら、核心に触れるようなところが今出てきています。どんどん意見を言っていただけるとありがたいなと思います。

辻委員：子どもに対して教員が何人、はっきり、分からないですけど、海南と海部が一緒になった場合、今現在おられる先生方全員もらえるのか、新しくできたら、先生方の数が減るのか、どんなもんでしょう。

三浦教育長：学級数で決まります。その他特殊学級の配置で決まるので、今は、海部小と海南小が、例えば来年合併したとしても多分学級数は変わりません。先生をいただくのが非常に厳しいです。現状維持にしたら、県費の先生は何年間か配置されます。

登井委員長：海部西小と海部東小が合併したときは教育長さんがおっしゃったように、少し加配の先生を何年間配置していただいたというようなことを聞いていますけれども、これは、新しい学校が開校して数年したら、それも定数通りとなります。

井口委員：結局、今のままでいったら、海南も海部も複式学級になって共倒れする。どこまでやれるか、そうですね、どこまで粘れるかですね。

三浦教育長：1、2年生が複式、3、4年生が複式、6年生が複式となった場合、すごく人数を減らされます。

登井委員長：教頭先生は担任することができるんですよ。だけど教頭先生を担任にまわして、全学年を単式で運営することができます。先ほど井口委員さんが言ったようにもうどこまで粘るのか、それとも、もう何年で統合というのを決めていくか。

三浦教育長：穴喰小まで小学校が一緒になったら全部学年 2 クラスなんですが、令和 9 年ひとクラスの学年が存在する。

事務局：本当に各小学校がくっついていかなければならないタイミングで、複式学級の解消がもうできないタイミングというお話もあったかと思いますが、やっぱりそういうのも見据え、一つの校舎を新たに対等合併という覚悟も含めて、レッドとかイエローというゾーンじゃないところをつくるという方法なんですが、長寿命化の計画を示させていただいているところで、令和 6 年から、長寿命化の大改修を、全学校で計画的に進めていこうかなというところがあるんですが、今回の統廃合の方針も含めて、10 年 20 年先を見据えて、どのタイミングで新しい校舎をどういう位置に移動するのかということも含めて話はつけていければなと思います。

三浦教育長：校舎を新しく更新する場合には、計画を持った形で、やっぱりものすごいお金が要ることなので、20 年後を考えながら、例えば 1 校になってもみんなが入れるような校舎を計画でつくっていないと、20 年後にもう劇的に子どもの数が増える想像がつきにくいのですが、ここらあたり意見を言っていたらありがたいんですが。

辻委員：もし小学校が一つになるとしたらね、今新しく建てることもありますけども、今の海南小学校は耐震できてると思う、やっぱり海南小を使ってですね、その三つの学校を合併してですね、耐震をきちっとして、20 年後まで使えるのはどうでしょうか。

事務局：耐震はもう全ての学校ができています。でも一番古いのは穴喰中学校で、最も古い建物です。海南小学校については 1977 年。どこも古いのは間違いありませんが、長寿命化計画で、その建物を長く使えるようにするために施しをします。いわゆるリノベーションに近いような格好ですので、費用はそこそこかかります。海南小学校で 3 校使うのかどうかというのはいかなうかというふうには確かに思います。

登井委員長：ただ今の再編統合を含めた計画の中で効率的に、行財政のことも考えながらやっていくというような形になりますので、簡単にポンポン新しい校舎を建てるというのは、ちょっとこれは現実的にはちょっと難しいかなと思います。

三浦教育長：あと一校となったときの通学距離にご意見を出し合っていたら、海沿いの移動時間が長いので、そのときに地震や津波があったということを考えると非常に怖い気がします。

事務局：今現在の穴喰小学校については、ご存知の通り、平成 26 年に体育館、それから校

舎に床上の浸水がありました。海の方が満ちている状態で、山間部で雨が降ることで、浸水するわけなんですけども、それはかなり可能性があるんで、例えば宍喰中学校の場所に行くのと避難防災公園とかも近いですっていうのは、これは案としてはあるかと思います。

登井委員長：他どうでしょうか、いろんな意見がでて、本当に核心を突いた意見もでています。現状の海南小の場所で耐震も含めていいんじゃないかという意見もあります。

ちょっと時間がきれたので、次の視点、地域の視点や、それからまちづくりの視点や学校支援のところを読んでいただけましたでしょうか。

福田委員：スクールバスの検討をしますとあるんですけど、この人材が多分ほとんど高齢化していて、若手人材の確保、人材育成っていうのが本当に問題になってくるのではないかなと思います。

登井委員長：ありがとうございます。今福田委員さんの方からスクールバスを運行するにあたって、運転手さんの人材確保、そして研修が必要ではないかというご意見いただきました。どうでしょうか。

事務局：スクールバスについての状況なんですけど、海南小学校の区域では4台、海部小学校の区域では1台、それぞれ運行しています。これには幼稚園の園児も乗っておりまして、海南小学校では、川上地区に5歳児が3名、浅川地区には4歳児が1名、5歳児が3名、がスクールバスにそれぞれ乗車をしているというようなところでございます。いわゆる臨時の職員さんという対応していますが、これだけではなかなかお仕事にならないこともありまして、お若い方というのはかなり難しいんですが、かなりベテランの運転手さんで、以前にもそういうものに携わってきたような方を基本的に今採用していくというような格好にしております。

辻委員：地域連携のところですね、小学校に求めることで放課後子ども教室のことなんですけども、親御さんたち、保護者の方がすごく希望があってやって欲しいなっていう、そういう希望があるんで、今やってるんですよ。毎日40名来るんですけども、そこに海部小学校が入ってきて、指導者の方も増やせばいいけれど、海部小学校の今の指導者の方入っていただいたらいけると思うんですけども、いろいろと安全面とか、安心安全で一生懸命やってるんですけども、人数的なもんとか、子どもたちが増えたりして、目の届かないということがひょっとしたら出てくるかもわかりませんが、そういうふうには安心安全で一生懸命やると思うんですけども、新しいのを建てるとしたら、その横ぐらいに、近いところに安心安全に過ごせるね、放課後子ども教室の施設を一緒に建てただけだったらありがたいなと思うんです。

谷本委員：私も 10 年後 20 年後を見据えた検討ということで、3 校が一つになって、1 校 1 校体制になることを考えて、この新校舎があったら一番良いなと思います。やっぱり海部、海南だけが統合するという話ではなくて、もっと長い目で新校舎も考えて、放課後教室も考えてもらってできたらいいのになと思います。少人数維持していくことによって教員の確保が難しいという問題で、その子どもにとっても先生方にとっても負担がたくさん増えているんだらうなっていうのを感じています。

登井委員長：ありがとうございました。どうでしょうか。どのような意見も構いません。こう考えておるんだよっていうことを出していただけると本当にありがたいんですが。

事務局（安孫子）：今日話し合ったことを聞いていて、トレードオフの関係がはっきりしたと思います。児童生徒数が減って、複式学級が増えていけば、加配教員がつかなくなってくる。地域に小学校を残して、コミュニティを維持すること、教育の充実を図っていくことも重要です。しかし、20 年後にまちを見たときに、小規模校の校区に新しい住民が移住するかなと思います。私は都市計画の技術者だったので、まちづくりの考えの中に、近隣住区論という考え方があって、教育施設、商業施設、公益施設、それから住宅、これらがきちんと配置をされることで一つの近隣住区のコミュニティが成立をするので、まちづくりの基本的な考えの一つになっています。そうすると教育施設として、新しい学校があって、そこがある程度の人数規模の学校であったときに、世帯で引っ越してくる可能性もある。まちづくりは、民間の動き、公的な自治体の動きがあって、仕掛けも大事なのかなと思います。それから縦割り行政になっていて、スクールバスでは、他の自治体でも公共交通の活性化会議とか、交通会議が設置されていて、町長部局と教育委員会で、スクールバスと公共交通を統合するような議論も進んできています。その上で、運転手の確保と安全安心のための人材育成ということも大事だということも言われてきていますので、そういった動きをこう醸し出すというんでしょうか、つくるためには、やはりある程度、近隣住区論的な考えがないと新しい世帯が入ってこないと思う。だから 10 年 20 年後仕掛けるときに教育の充実を考えつつもやっぱりまちづくりの観点は外せないし、町長部局の各課と連携していくことを醸し出していく考えは大事なのかなと、今日お話を聞いていてわかりました。以上でございます。

登井委員長：大変参考になります。ありがとうございました。最後になりましたけれどもその他何かございませんか。今日話し合ったことの感想とかそういうのがあればと思います。どうでしょうか。特にございませんか。ないようですので、事務局の方、次回の予定などを説明していただけたらありがたいと思いますので、よろしくをお願いします。

事務局：それでは今後のスケジュールについてご説明させていただきます。次回の委員会、

来年の 2 月に予定をいたしております。案内につきましては、通常通り連絡をさせていただきます。なお今後の委員会の議題ですが、次回の 2 月には基本方針をまとめた答申案についてご協議をいただきまして、3 月にはこれまでの内容をまとめた学校のあり方基本方針の最終案を、確認をしていただき、答申書の提出を行うというふうな流れになってまいります。

閉会